

新しい小児用ワクチンのいろいろ

平成 22 年 10 月 藤本循環器科・内科 院内講演

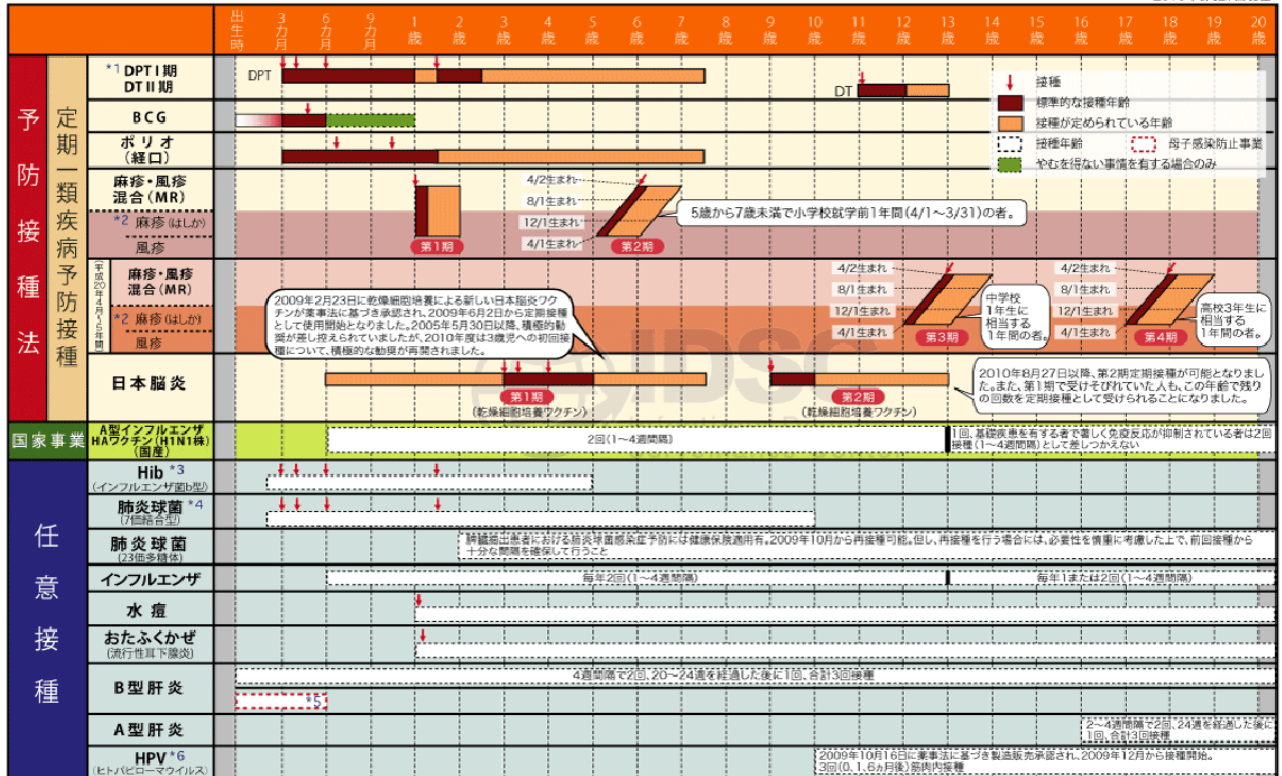
資料：国立感染症研究所、グラクソ・シミスクライン（株）



日本の定期/任意予防接種スケジュール(20歳未満)

ver. 2010.08.27

2010年8月27日現在



*1 D:ジフテリア、P:百日咳、T:破傷風を示す。
 *2 原則としてMRワクチンを接種。なお、同じ期間内で麻疹ワクチンまたは風疹ワクチンのいずれか一方を受けた者、あるいは特に単抗原ワクチンの接種を希望する者は単抗原ワクチンを接種。
 *3 2008年12月19日から国内での接種開始。生後7か月以上5歳未満の間のある者に行うが、標準として生後7か月以上7か月未満で接種を開始すること。接種方法は、通常、4～8週間の間隔で3回皮下接種（医師が必要と認めた場合には3週間間隔で接種可能）。3回目の接種後おおむね1年の間隔を置いて、1回目接種、接種開始が生後7か月以上12か月未満の場合は、通常、4～8週間の間隔で2回皮下接種（医師が必要と認めた場合には3週間間隔で接種可能）。2回目の接種後おおむね1年の間隔を置いて、1回目接種。接種開始が1歳以上5歳未満の場合、通常、1回皮下接種。
 *4 2009年10月16日に薬事法に基づき製造販売承認され、2010年2月24日から国内での接種開始。生後2か月以上7か月未満で開始し、27日以上の間隔で3回接種。追加接種は通常、生後12～15か月に1回接種の合計4回接種。接種もれ者には、次のようなスケジュールで接種。生後7か月以上12か月未満の場合：27日以上の間隔で2回接種したのち、60日以上おいて追加接種を1歳以降に1回接種。1歳：60日以上の間隔で2回接種。2歳以上9歳以下：1回接種。
 *5 妊娠中に検査を行い、HBe抗原陽性（HBe抗原陽性、陰性の両方とも）の母親からの出生児は、出生後できるだけ早期及び、生後2か月にHBs抗原αロプリン（HBIg）を接種。ただし、HBe抗原陽性の母親から生まれた児の場合は2回目のHBIgを省略しても良い。更に生後2.3か月後にβワクチンを接種する。生後6か月後にHBs抗原及び抗体検査を行い必要に応じて任意の追加接種を行う（健康保険適用）。
 *6 HPV16型・18型（子宮頸癌予防）、日本産科婦人科学会、日本小児科学会、日本婦人科産科学会連名の「ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチン接種の普及に関するステートメント」：平成21年10月16日付。によると、推奨される年齢は、以下の通りとなっています。「優先的接種推奨年齢：11～14歳の女子。11～14歳で受けることができなかった場合の接種推奨年齢：15歳～45歳の女子。」
 © Copyright 2010 IDSC All Rights Reserved. 無断転載・改変を禁ずる。

麻疹風疹混合ワクチン

2006年6月から、第1期（1歳児）および第2期（5～7才未満で小学校就学前の1年間）の2回接種が始まりました。

平成20年から24年度の5年間：中学1年生と高校3年生も対象に。

日本脳炎

- 新しいワクチンが開発されたことから、今年度から3才の接種について積極的勧奨を再開。
- 来年度、9・10才になる子供に接種を呼びかける。供給量に制限あり、来年度5～8才になる子供は再来年以降順次。
- 定期接種は本来3才で2回、4才で1回、9才で1回の計4回公費で接種。

子宮頸がん予防ワクチン

子宮頸癌はほぼ100%がヒトパピローマウイルス（HPV）というウイルスの感染による。

- HPV16型と18型の感染を防ぐワクチンで、海外ではすでに100カ国以上で使用
- 日本では2009年10月に承認され、2009年12月22日より一般の医療機関で接種することができる
- 感染を防ぐために3回のワクチン接種

Hib ワクチン (商品名：アクトヒブ)

Hib (ヒブ) は真正細菌であるインフルエンザ菌(*Haemophilus influenzae*)b型の略称。冬場に流行するインフルエンザの原因微生物となるインフルエンザウイルスとは異なる。

- Hib は肺炎・敗血症・喉頭蓋炎などさまざまな感染症を引き起こし、なかでも重篤な感染症が Hib による細菌性髄膜炎 (Hib 髄膜炎：発症すると治療を受けても約5% (日本で年間約30人) の乳幼児が死亡し、約25% (日本で年間約150人) に知的障害などの発育障害や聴力障害などの後遺症が残る)
- 日本では Hib ワクチンの認可が遅れ、2008年12月に任意接種 (有料) が一般的に可能
- すべてのワクチンと同時接種が可能
- 生後2ヶ月～7ヶ月までに接種開始する場合は、4～8週間間隔で3回、追加免疫として3回目の接種から約1年後に1回の計4回接種である。生後7ヶ月～1歳未満までに接種開始する場合は、同じく4～8週間間隔で2回、追加免疫として2回目の接種から約1年後に1回の計3回接種である。1歳を越えると追加免疫はなく1回のみで抗体獲得
- ヒブワクチンは、生後2ヶ月もしくは3ヶ月以上 5歳以下の乳幼児全員に できるだけ早くに受けていただきたい。

小児用肺炎球菌ワクチン

5歳未満人口10万人当たり罹患率は、髄膜炎以外の侵襲性感染症が20人前後、髄膜炎が3人弱。髄膜炎の予後には、抗菌療法の発達した現代でも改善は見られず、治癒88%、後遺症10%、死亡2%と報告されている。

- 日本でも、2010年2月より接種できるようになりました。
- 高齢者の肺炎球菌ワクチン (ニューモバックス NP) は、この小児用肺炎球菌ワクチン (プレベナー：PCV) とは全く違うもの。
- 小児肺炎球菌ワクチンは世界の約100カ国で承認され、すでに41カ国で定期接種に導入されているワクチンです。ヒブワクチンと同時接種をすることで、細菌性髄膜炎予防に非常に有効です。

厚生省予防接種部会は10月6日、インフルエンザ菌b型 (ヒブ)、小児用肺炎球菌、子宮頸がんの3種類のワクチンについて、公費で接種が可能な予防接種法の定期接種に位置づけるべきだとする緊急の意見書をまとめ、同省に提出した。

3ワクチンは、世界保健機関 (WHO) が接種を勧告し、米、英など先進7カ国で定期接種のプログラムとして実施していないのは日本だけという。